

運動部員の部活動適応感およびスポーツパフォーマンスに影響する 指導者のコーチング能力に関する研究

—部活動指導者へのフィードバック用のセルフ・コントロール感尺度およびコーチング評価尺度の開発—

清水安夫¹⁾ Annear Michael²⁾
堀正士²⁾ 元永拓郎³⁾ 宮崎光次⁴⁾

抄録

日本の学校における部活動の普及率は高く、とりわけ中学校や高等学校における部活動は一般的な課外教育課程としてみなされている。一方、近年、学校の部活動における指導上の問題が多発しており、その背景要因として、部活動指導者である顧問教師の過剰労働などによる心理的な問題が想定されている。そこで本研究では、部活動の指導者である顧問教員の「不適切な指導」および「適切な指導」の背景要因となる「顧問教師の感情コントロール」が運動部員の部活動への適応やパフォーマンスに対して、どのように影響するかを検討することを目的とした。

本研究の対象者は、日本全国の運動部活動に参加している中学生及び高校生 2,500 名であり、インターネットによる質問紙調査法によりデータをサンプリングした。調査の内容は、運動部活動指導を行っている教師の心理的な側面を測定するための「指導者の感情コントロール」「指導者の不適切な指導」「指導者のコーチング評価」「指導者の適切な指導」の各測定指標を用いた。また、運動部に参加している中学生および高校生が、自分が参加している部活動に対して自己評価を行う「運動部員の部活動エンゲージメント」「運動部員の不適応感」「運動部員の自己成長感」の各測定指標に回答を行った。

分析の結果、統計学的に有意性が確認された7つの測定指標が作成された。また、これらの測定指標を用いた仮説モデルを分析したところ、統計学的に有意なモデルが確認された。実証されたモデルをもとに、各観測変数間のパス係数を検討したところ、「指導者の感情コントロール」が「適切な指導」および「不適切な指導」への直接効果が示された。さらに、各媒介変数を経由した間接効果として、「指導者の感情コントロール」が部員の「部活動エンゲージメント」「部活動不適応感」「部活動での自己成長感」にも影響があることが示された。そのため、部活動指導者は、感情のコントロールを中心とした指導法を検討することが、よりよい指導に繋がることが推察される。また、部活動指導者が参加できる研修の機会などを設けることや指導者用のプログラムの開発などが、部活動指導上の問題の発生の抑制にもつながり、よりよい指導が実践されることが推察される。最終的には、アメリカやヨーロッパ諸国で展開されているクラブ活動の指導者のように、ディプロマやライセンスなどの制度化を国レベルもしくは教育委員会レベルでの研修会を実施する必要があると考える。

キーワード：指導者評価、感情コントロール、部活動適応感、部活動自己成長感、部活動エンゲージメント

-
- 1) 国際基督教大学 〒181-8585 東京都三鷹市大沢 3-10-2
 - 2) 早稲田大学 〒169-8050 東京都新宿区戸塚町 1-104
 - 3) 帝京大学 〒192-0395 東京都八王子市大塚 359
 - 4) 桜美林大学 〒194-0294 東京都町田市常盤町 3758

The Influence of Sports Coaches' Emotional Expression on Students in the Extracurricular Sports Club Activities of Junior High and High Schools

—Development of Perceived Psychological Scales for School Athletic Club Members—

Yasuo SHIMIZU¹⁾ Michael ANNEAR²⁾
Masashi HORI²⁾ Takuro MOTONAGA³⁾ Mitsuji MIYAZAKI⁴⁾

Abstract

INTRODUCTION:

Extracurricular sports club activities are common in Japanese junior-high and high schools. After school practices are usually run by schoolteachers with little support from specialists. Introducing sports specialists into extracurricular activities has been suggested as a way of reducing teacher workload, although concerns have been expressed about the potential effects on student behavior and educational outcomes. In this study, we examined how coaches' emotional expression affects students' evaluation of coaches and their adaptation to club activities.

METHODS:

Subjects included 2500 Japanese junior high and high school students who were members of sports club activities in their school (mean age 15.23, SD:1.739). They voluntarily answered a questionnaire composed of items from the Coaching Emotion Control Scale (CEC), the Inappropriate Guidance Scale (IG), the Appropriate Guidance Scale (AG), the Coaching Evaluation Scale (CE), the Club Activity Engagement Scale (CAE), the Maladaptation to Club Activity Scale (MCA) and Self-growth for Club Activity Scale (SCA). All of these scales were originally developed for this study and confirmed as having acceptable reliability and meaningful content validity. Covariance structure analysis was conducted to confirm the acceptability of our hypothetical model and the relationship among the seven scales.

RESULTS:

We hypothesized that coaches' negative emotion control would have an impact on students' motivation and adaptation to their sports club. The results of analysis showed that our hypothetical model, with the CEC as an independent variable, and the SCA as a dependent variable, with the IG, AG, CE, CAE and MCA as mediators, yielded acceptable fit indices (GFI: 0.995, AGFI: 0.977, CFI: 0.997, RMSEA: 0.049). CEC was found to have direct effects on IG (path coefficient: 0.53, $p < 0.001$) and AG (path coefficient: -0.14, $p < 0.001$). Indirect effects of CEC on SCA via AG, CAE, and MCA were also found statistically significant.

DISCUSSION:

Our hypothetical model appears to effectively predict how sports coaches' negative emotion control indirectly affects students' perceived self-growth in sports clubs of junior high and high schools. These findings imply that if sports club coaches have opportunities to learn how to control and express their emotions, they can be better coaches and their students can have better experience in club activities.

Key Words : coaching evaluation, coaching emotion control, adaptation for club activities, self-growth for club activities, club activity engagement

- 1) International Christian University, 3-10-2 Osawa Mitaka, Tokyo Japan
- 2) 1-104 Tozukamachi Sinjuku Tokyo, Japan
- 3) 359 Otsuka Hachioji Tokyo, Japan
- 4) 3758 Tokiwamachi Machida Tokyo, Japan

1. はじめに

近年、中学校・高等学校・大学などにおける運動部活動中の問題が顕在化するようになり、適切な部活動指導に関する議論が行われている。スポーツ庁(2018)では、学校における運動部活動における様々な問題点について、いち早く対応を行えるように「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」を作り、各学校現場への通達だけでなく、スポーツ庁のホームページ上からインターネットを通じてダウンロード出来るようにし、広く情報の開示を行っている。その前文を概略すると、1) 運動部活動は、学校教育の一環として行われるものであり、2) 人間関係の構築、自己肯定感、責任感、連帯感の涵養を図るために効果を発揮させるものである。その一方で、現在の学校における運動部の活動に関しては、3) 運動部活動を運営する上で社会環境が大きく変化し、学校や教師だけの対応は難しくなった現状を挙げており、現代における4) 生涯教育や健康の維持増進の観点からも、部活動のあり方を抜本的に変える必要があることを述べている。さらに、各学校現場では、5) 運動部活動の指導・運用の体制を変革することが必要であると、主に5つの観点からまとめている。つまり、端的に言うと、従来通り、学校教育における部活動の目的や効用を踏まえつつも、現状の指導体制を変革せざる負えない状況にあるということが読み取れる。

とりわけ、学校部活動におけるガイドラインが制定された背景には、昨今の部活動内における不適切な指導(体罰、ハラスメント、予見できた事故)などが頻発したことによるところが大きい。運動部活動における指導者の問題を長年に渡り取材を行ってきた、島沢(2017)によると、運動部内で問題となる指導者やその事案の共通した特徴として、「部活動にハマる指導者」「周囲の問題意識の低さ」「スポーツ現場と社会一般の常識の乖離」などを挙げている。また、部活動における問題のある指導について、「指導者の感情や情動性の側面」からの先行研究では、「怒りの抑制」を主としたアンガーマネジメントの技法の習得を指導者が行うことの有効性が示されており、その解決策の一つとして挙げられている(矢野, 2019)。

スポーツ庁(2017)の統計によると、日本全国の中学・高校生の運動部活動参加率は、中学校で65.%(男子:75.1%, 女子:54.9%), 高校で41.9%(男子:56.4%, 女子:27.1%)であり、現在もなお、多くの中高生が運動部に加入し活動を行っている。学校教育における部活動は、1989年の学習指導要領の改訂で「生徒の人物

評価の対象」となって以来、課外活動として参加が奨励され、人物評価を行う上での学校内活動として、今なお重要な役割を担っている。一方、スポーツ庁(2017)の調査によると、運動部活動で休養日を設定している中学校は、「週に1日(54.2%)」「週に2日(14.1%)」「週3日以上(2.9%)」「週休なし(22.4%)」である。また、保健体育の教員ではなく、かつ担当部活動の競技経験がない顧問教師の割合は、中学校で45.9%, 高校で40.9%と高い割合を示している。この調査結果は、運動部員および顧問教師にも「時間的負担」と「心身への負担」が大きいことを示している。現在、働き方改革の社会的な流れと共に、学校現場における教師の働き方改革も推進されている。その最たる議論の的となっているのが部活動指導である。特に、教師のメンタルヘルスの改善において、大きな問題となるのが部活動指導における勤務時間外労働や休日出勤が教師の心身への大きな負担となる点である(清水, 2019)。

今後、文部科学省の政策が進めるように、外部指導員制度を導入し、部活動の指導職務を専門家に依頼した場合、さらなる勝利至上主義による過剰な練習量・練習時間の設定が行われ、より過熱化した部活動運営が行われぬかというような懸念事項も取り上げられている。また、現状の顧問教師が部活動指導を行う上で、指導上の知識不足による間違った指導方針や指導課程が問題となっている。そのような状況が改善されぬままに、外部指導者を雇用する際の基準の設定や評価についての議論の結果は明確にされていない。さらに、現状の顧問教師のオーバーワークによる疲労感・焦燥感・集中力欠如による感情抑制の欠如にもとづく、指導上の問題が多発していることが予測される中、外部指導者に依頼した場合、学校や教育委員会は外部指導者に対して、どのようにサポートシステムを構築すべきなのかなど、課外活動としての部活動には、問題点が数多く残っている。

そこで本研究では、現在、運動部活動指導を行っている教師の心理的な側面から調査し、「指導者の感情コントロール」が「指導者の適切な指導」「指導者の不適切な指導」への影響性について検討し、さらに、中高生運動部員の部活動におけるポジティブな側面(例えば、「部活動エンゲージメント」「部活動による自己成長感」)やネガティブな側面(例えば、「部員の不適応感」)への影響性について分析を行うこととした。そのために、各種の測定指標(「指導者の感情コントロール」「指導者の不適切な指導」「指導者のコーチング評価」「指導者の適切な指導」「運動部員の部活動エンゲージメント」「運動部員の不適応感」「運動部員の自己成長感」)

を開発し、その関係性の検討を行うことにより、指導者の感情コントロールが部員に対してどのように影響するのかを検討することとした。

2. 目的

本研究では、指導者の心理的な状態（「指導者の感情コントロール」）を起点に、運動部員がどのように指導者を評価し、部活動に適応していくかについて、上記の各種測定指標を作成することにより、検討を行うことを目的とした。具体的には、部活指導者である顧問教師の心理的測定指標である「指導者版感情コントロール測定尺度 (Coaching Emotion Control : CEC)」「指導者版不適切な指導行動測定尺度 (Inappropriate Guidance : IG)」「指導者版適切な指導行動測定尺度 (Appropriate Guidance : AG)」「指導者版コーチング評価尺度 (Coaching Evaluation : CE)」の作成を行った。さらに、運動部員の心理的測定指標である「運動部員版部活動エンゲージメント測定尺度 (Club Activity Engagement : CAE)」「運動部員版運動部への不適応感測定尺度 (Maladaptive for Club Activity : MCA)」「運動部員版部活動自己成長感測定尺度 (Self-growth for Club Activity : SCA)」の各測定指標を作成した。

3. 方法

1) 調査対象者

本研究における調査対象者は、日本全国の中学生及高校生の運動部員 2,500 名である（平均年齢：15.23 歳，SD：1.739）。

2) 調査方法

調査方法は、インターネット専門会社に調査を依頼し、中高生の子どものいる保護者で、モニター契約をしている対象者をスクリーニングした後、本調査内容に参加協力を同意した者を対象に調査画面（質問画面）を送付し、回答を得る方法を採用した。

3) 調査内容

調査内容は、基本的属性（年齢、性別、所属している部活の種類、1回の平均的練習時間、1週間における学校での部活動頻度）をはじめ、今回の調査研究のために原案を作成した①「指導者版感情コントロール測定尺度」、②「指導者版不適切な指導行動測定尺度」、③「指導者版適切な指導行動測定尺度」、④「指導者版コーチング評価尺度」、⑤「運動部員版部活動エンゲージメント測定尺度」、⑥「運動部員版運動部への不適応感測定尺度」、⑦「運動部員版部活動自己成長感測定尺度」の各測定指標による調査を実施した。

4) 分析方法

インターネット調査にて得られたデータに対して、各測定指標を作成するために、探索的因子分析（最尤法 promax 回転）、主成分分析、信頼性分析（Cronbach の α 係数の算出）および共分散構造分析を実施した。

なお、すべての統計的分析は、日本 IBM 社の SPSS23.0 および AMOS23.0 にて実施した。

5) 倫理的配慮

本研究では、調査にかかるデータサンプリングをすべてインターネット調査会社に依頼した。当該インターネット調査会社にモニター登録をしている者の中から、調査の対象者である中高生の子どもの協力を得られる保護者に対して、「無記名式、途中棄権の自由、個人を特定しての分析を実施しない等」の説明を行い、その中から同意を得られた者を対象に調査画面を送付した。さらに、その中から自主的に調査への参加協力を得られた中高生からデータのサンプリングを行った（保護者の同意を得ての実施である）。なお、本調査を実施するにあたり、国際基督教大学研究倫理審査委員会より承諾を得ている（研究倫理審査承諾：No2019-13：2019年6月18日承認）。

4. 結果及び考察

1) 測定指標の作成

(1) 指導者版感情コントロール測定尺度

探索的因子分析の結果から、「指導者版感情コントロール測定尺度」には、5 因子各 4 項目の合計 20 項目が抽出された。また、信頼性分析の結果、各下位因子における α 係数は、0.885–0.942 であった。抽出された因子は、各因子を構成する項目から、第 1 因子を「練習中での落ち込み」、第 2 因子を「練習への没頭」、第 3 因子を「練習中の怒りの表出」、第 4 因子を「練習中の活力」、第 5 因子を「練習中での倦怠感」と命名した (Table 1)。また、分析の結果から、本測定指標の各下位因子ごとの項目における内容的な妥当性および信頼性係数による内的整合性があることが示された。

Table 1 指導者版感情コントロール測定尺度

因子名	α 係数
F1 練習中での落ち込み	0.942
F2 練習への没頭	0.926
F3 練習中の怒りの表出	0.927
F4 練習中の活力	0.905
F5 練習中での倦怠感	0.885

(2) 指導者版不適切な指導行動測定尺度

探索的因子分析の結果から、「指導者版不適切な指

「指導行動測定尺度」には、5 因子各 4 項目－6 項目の合計 22 項目が抽出された。また、信頼性分析の結果、各下位因子における α 係数は、0.934－0.968 であった。抽出された因子は、各因子を構成する項目から、第 1 因子を「パニッシュメント指導」、第 2 因子を「アンガー指導」、第 3 因子を「ネグレクト指導」、第 4 因子を「フラストレーション指導」、第 5 因子を「シャットアウト指導」と命名した (Table 2)。また、本社度においても各下位因子ごとの内容的な妥当性および信頼性係数による内的整合性があることが示された。

Table 2 指導者版 不適切な指導行動測定尺度

因子名	α 係数	
F1	パニッシュメント指導	0.968
F2	アンガー指導	0.946
F3	ネグレクト指導	0.934
F4	フラストレーション指導	0.961
F5	シャットアウト指導	0.956

(3) 指導者版 適切な指導行動測定尺度

探索的因子分析の結果から、「指導者版 適切な指導行動測定尺度」には、5 因子各 4 項目－8 項目の合計 24 項目が抽出された。また、信頼性分析の結果、各下位因子における α 係数は、0.937－0.959 であった。抽出された因子は、各因子を構成する項目から、第 1 因子を「モデリング」、第 2 因子を「コミュニケーション」、第 3 因子を「ディスクリプション」、第 4 因子を「コンサルテーション」、第 5 因子を「チームビルディング」と命名した (Table 3)。また、分析の結果から、本測定指標の各下位因子ごとの項目における内容的な妥当性および信頼性係数による内的整合性があることが示された。

Table 3 指導者版 適切な指導行動測定尺度

因子名	α 係数	
F1	モデリング	0.968
F2	コミュニケーション	0.946
F3	ディスクリプション	0.934
F4	コンサルテーション	0.961
F5	チームビルディング	0.956

(4) 指導者版 コーチング評価尺度

探索的因子分析の結果から、「指導者版 コーチング評価尺度」には、7 因子各 3 項目－11 目の合計 38 項目が抽出された。また、信頼性分析の結果、各下位因子における α 係数は、0.932－0.975 であった。抽出された因子は、各因子を構成する項目から、第 1 因子を「技術指導」、第 2 因子を「雰囲気づくり」、第 3 因子を「ルール指導」、第 4 因子を「積極的参加指導」、第

5 因子を「個別相談指導」、第 6 因子を「部員理解」、第 7 因子を「部内人間関係調整」と命名した (Table 4)。また、分析の結果から、本測定指標の各下位因子ごとの項目における内容的な妥当性および信頼性係数による内的整合性があることが示された。

Table 4 指導者版 コーチング評価尺度

因子名	α 係数	
F1	技術指導	0.975
F2	雰囲気づくり	0.963
F3	ルール指導	0.932
F4	積極的参加指導	0.953
F5	個別相談指導	0.948
F6	部員理解	0.932
F7	部内人間関係調整	0.940

(5) 運動部員版 部活動エンゲージメント測定尺度

探索的因子分析の結果から、「運動部員版 部活動エンゲージメント測定尺度」には、4 因子各 4 項目－6 目の合計 20 項目が抽出された。また、信頼性分析の結果、各下位因子における α 係数は、0.919－0.957 であった。抽出された因子は、各因子を構成する項目から、第 1 因子を「部活への活力」、第 2 因子を「部活への情熱」、第 3 因子を「部活への没頭感」、第 4 因子を「部活への充足感」と命名した (Table 5)。また、分析の結果から、本測定指標の各下位因子ごとの項目における内容的な妥当性および信頼性係数による内的整合性があることが示された。

Table 5 運動部員版 部活動エンゲージメント尺度

因子名	α 係数	
F1	部活への活力	0.945
F2	部活への情熱	0.941
F3	部活への没頭感	0.919
F4	部活への充足感	0.957

(6) 運動部員版 運動部への不適応感測定尺度

主成分分析の結果から、「運動部への不適応感測定尺度」には、1 因子 10 項目が抽出された。また、信頼性分析の結果、各下位因子における α 係数は 0.960 であり、構成されている項目による内容的な妥当性はもとより内的整合性も確認された。

(7) 運動部員版 部活動自己成長感測定尺度

主成分分析の結果から、「運動部員版 部活動自己成長感測定尺度」には、1 因子 10 項目が抽出された。また、信頼性分析の結果、各下位因子における α 係数は 0.957 であり、構成されている項目による内容的な妥当性はもとより内的整合性も確認された。

2) 各測定指標間の関係性の検討

本研究において作成した、7つの測定指標間の関係性を検討するために、共分散構造分析を行った。分析を行うに当たり、各測定指標における下位因子を積算し、観測変数とした。なお、仮説モデルは、以下の構造モデルを想定した。

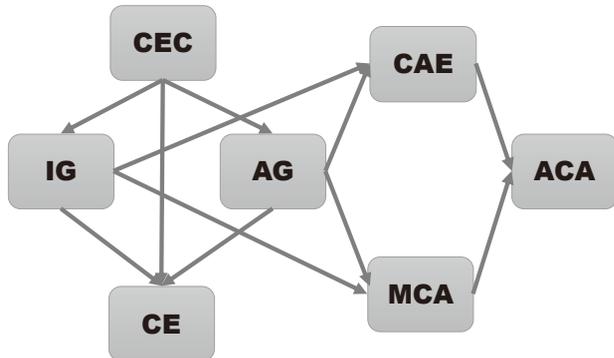
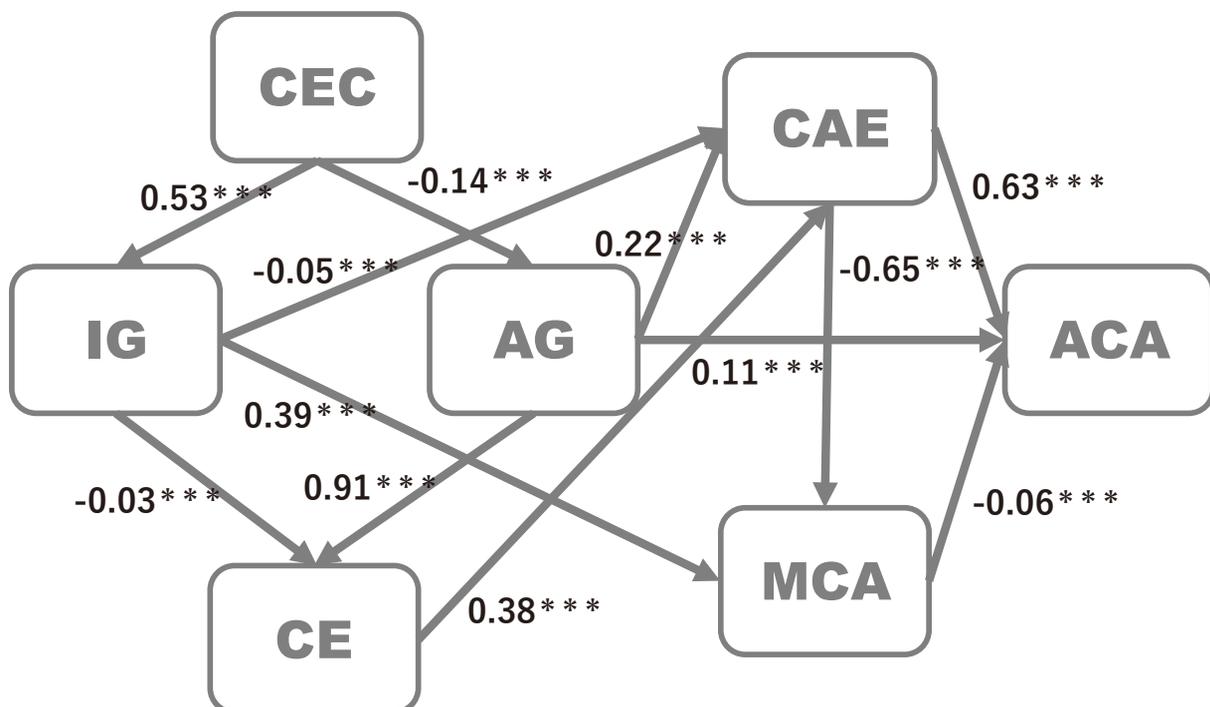


Figure 1 運動部の部活指導者が運動部員に与える影響の仮説モデル

仮説モデルにもとづく共分散構造分析を行うプロセスにおいて、各パス係数の統計学的な有意性とモデル全体の適合度指標とを合わせて、複数回の分析を繰り返した。その結果において、最も統計学的に必要な条件となっている各適合度指標を満たし、また、有意なパス係数が得られたモデルが Figure 2 に示した結果である。各観測変数間のパス係数は、すべて統計学的に有意であり ($p < 0.001$)、各適合度指標は $GFI=0.995$, $AFGI=0.977$, $CFI=0.997$, $RMSEA=0.049$ と十分なモデルの適合性を示している。

Figure 2 運動部の部活指導者が運動部員に与える影響の共分散構造分析の結果



共分散構造分析の結果における各観測変数間のパス係数を検討した場合、以下の内容にまとめることができる。まず、「指導者の感情コントロール」は、「不適切な指導」には、統計学的にポジティブな直接的な影響 ($\beta=0.53$, $p < 0.001$) があり、逆に「適切な指導」にはネガティブな直接的な影響 ($\beta=-0.14$, $p < 0.001$) が示された。

次に、「不適切な指導」は、「コーチング評価」に対してネガティブな影響 ($\beta=-0.03$, $p < 0.001$) を示し、同様に「部活動エンゲージメント」にもネガティブな直接的な影響 ($\beta=-0.14$, $p < 0.001$) を示した。「部活動不適応感」にはポジティブな直接的な影響 ($\beta=0.39$, $p < 0.001$) を示した。

この結果とは反対に、「適切な指導」は、「コーチング評価」に対してポジティブな直接的な影響 ($\beta=0.91$, $p < 0.001$) を示し、また、「部活動エンゲージメント」にもポジティブな影響 ($\beta=0.22$, $p < 0.001$) を示し、「部活動成長感」にもポジティブな影響 ($\beta=0.11$, $p < 0.001$) を示した。

「コーチング評価」は、「部活動エンゲージメント」にのみポジティブな影響 ($\beta=0.38$, $p < 0.001$) を示した。また、「部活動エンゲージメント」は、「部活動不適応感」に対してネガティブな影響性 ($\beta=-0.65$, $p < 0.001$) を示し、さらに、「部活動成長感」へのポジティブな影響 ($\beta=0.63$, $p < 0.001$) を示した。なお、「部活動不適応感」は、「部活動成長感」に対してのみネガティブな影響 ($\beta=-0.06$, $p < 0.001$) を示した。

これらの結果から、運動部の指導者は、自己の感情コントロールを行うことが、運動部員の指導者に対する指導力認知を高めることが推察される。さらに、部員の心理的なネガティブ要因を低減し、ポジティブ要因を増幅することから、部員の部活動への適応性を高め、逆に不適応性を低下させ、その結果として成長感を増幅させパフォーマンスを向上させる可能性が示唆された。その一方で、指導者が自己の感情をコントロール出来ず、部活動の練習中に部員の前で良い面でも悪い面でも感情表出を行う場合には、部員からの指導力に対する認知が低下し、また、部へのエンゲージメントの低下、部活動不適応感の上昇、部活動による自己成長感の低下からパフォーマンスの低下という負のスパイラルに陥る可能性が示唆される。

今後、中学校や高等学校での運動部を運営する指導者は、本研究の結果により抽出された「感情コントロール」の内容の中でも、とりわけ「落ち込み」「怒りの表出」「倦怠感」などの心理的にはネガティブに影響することが予測される感情のコントロールを行うことが、部員のモチベーションを向上させ、部活動への遣り甲斐や適応を促進させることが予測される。また、個人で感情コントロールを行うことが難しい場合には、「アンガーマネジメント」や「情動性コントロールのスキル（社会性と情動性の学習）：Social and Emotional Learning Program」などにおいて技法を学ぶことも有効な手段であると考えられる。

5. まとめ

現在、部活動指導者に対する研修の機会などは、それほど恵まれた状態ではない。部活動の顧問を依頼される際、多くの学校現場では、教員自身が中学生や高校生、または大学生の時に運動部活動を行っていたという理由をもとづいて担当することになる。確かに、過去に自分が運動部員または選手として専門競技を練習して来たという経験はあるかもしれないが、それが即戦力としての指導者となり得ないことは、学校現場においても広く知られていることである。多くのスポーツ科学の専門家によって、一定の指導者としてのプログラムへの参加の必要性が問われているにも関わらず、学校教育現場（中学校・高校など）では、当然のごとく校務分掌の割り当てと同じように分担される風習・因習・文化がある。このようなネガティブなスパイラルは、どこかの時点で断ち切らなければ、現在、数多く部活動指導現場で起こっている問題は解決に至らない。

そのため、エビデンスをベースとした発想のもとに、

具体的な「部活動指導プログラム」を構成し、教員研修会等において部活動の顧問教師は、必須科目として受講する義務を制度化することが解決策の一つとして考えられる。実際に、ヨーロッパやアメリカでの青少年を対象としたスポーツクラブの指導者には、ディプロマ制度やライセンス制度が確立しており、安全面の指導（CPR や AED の使用方法からケガの防止、緊急時の応急処置など）をはじめ、競技別の指導法からスポーツ全般の指導に必要なコーチングなどについてもスポーツ科学のエビデンスをもとに研修制度がプログラム化されている。このような海外の上手くスポーツ活動に貢献している運営方法に倣い、日本でも研修成果に伴う認定書（certificate, diploma or license）のようなものを各都道府県もしくは市の教育委員会にて発行するような制度を設けることも必要であると考えられる。

とりわけ、働き方改革に伴う、部活動指導者の減少を想定した場合、多くの民間からの外部指導員を導入する必要が出てくることが想定される。その場合、指導者研修制度によるプロフェッショナル化だけでなく、どのように「教育的な意義があるのか」という点を学校側が保持する必要があると考える。そうしない限りは、「勝つことのできる指導者」「勝たせることのできる指導者」に注目が集まってしまい、勝利至上主義的な発想が部活動に根付いてしまう可能性が否めない。その場合、外部指導員のスタンプレーが横行してしまう危険性があることが予測できる。学校教育における課外活動の一環であることの意義を十分に考慮しながら、教師もしくは外部指導員も同じく研修制度を受けることにより、フィロソフィーとスキルとを同時に学んでいける制度化が望まれると考える。

【謝辞】

本研究は、2019年度「笹川スポーツ財団」の研究助成を得て実施したものであります。研究のご支援をいただくに当たり、笹川スポーツ財団の関係者の皆様には、大変お世話になりましたこと、心より御礼申し上げます。

【引用文献】

- 島沢優子 (2017). 部活が危ない. 講談社現代新書, 240 ページ.
- 清水安夫 (2019). 運動部活動における適切な指導. 学校メンタルヘルス. 22, 1, 17-19.
- スポーツ庁 (2017). 平成 29 年度運動部活動等に関する実態調査報告書. 東京書籍, 207 ページ. <最終アクセス日, 2020 年 1 月 25 日>
- https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop04/list/detail/_icsFiles/afieldfile/2018/06/

[12/1403173_2.pdf](#)

スポーツ庁 (2018). 運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン. <最終アクセス日: 2020年1月29日>

https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/shingi/013_index/toushin/_icsFiles/afieldfile/2018/03/19/1402624_1.pdf

矢野宏光 (2019). 指導現場における怒りのコントロール. 学校メンタルヘルス, 22, 1, 22-25.

